

fls. and the line drawing of the ovaries). in Journ. Jap. Bot. 47: 121-123, 1972. 山崎富佐子: 562 銀竜 Ginryū. (現代椿集, Encyclopedia of Camellias in color, p. 392 (diagnosis), et p. 219 (photo), 1972, 講談社. 箱田直紀・武永順次・松本正雄: サザンカの品種分化に関する史的考察. 3. 学名の変遷と植物学的分類, p. 5-8. 東京農工大学農学部農場研究報告 6, pp. 65, 2 pl., 1974. 興林会: 標準色鑑 pp. 51+26, 1943—[Ridgeway: Color Standards and Nomenclature, 1912 の事実上の模写本]. The Royal Horticultural Society: The R.H.S. Colour Chart. 1966, London (R.H.S.). The Royal Horticultural Society: Horticultural Colour Chart 2 vols. 1941, London (H.C.C.).

□ S. Lipschitz & I. Vassilczenko: **Herbarium Centrale URSS** (Herbarii Instituti Botanici nomine V.L. Komarovii Academiae Scientiarum URSS historia ab initiis ad tempora nostra) Nauka 発行 1968 年 露文, 142 pp. 78 カペイカ。本書は今年レニングラードで開かれた第 12 回国際植物学会に参加された大橋広好博士が寄贈をうけて持ち帰られたものである。ソビエトの出版物の中でも分類学研究史も兼ねたハーバリウムの案内書は、我が国ではほとんど知られていなかったと思われるので、少し古いを紹介する。本書は序文の他、3 部に分かれた本文と 50 頁をこえる長い付録から成る。本文は表題の示すとおりコマロフ植物研究所の標本室の紹介である。現在のコマロフ植物研究所は 1931 年に、それまでは各々独立した組織であった Botanical Museum of Scientific Academy (1835-1931) と Leningrad Botanic Garden Herbarium (1823-1931) を統合して作られたものである。本文ではそれら研究所の前身がどのようにして成長してきたかを述べ、現在の研究所となつてからの研究の発展、所蔵標本の充実などを解説している。また「高等植物分類地理部門と、その基礎をなす標本館の基本的な任務は Flora URSS の編集と出版であった。」という同書の刊行のいきさつも述べられている。ソビエト連邦内のフロラの調査を行なった研究者とその調査記録(場所と収蔵標本数)が、地域別、年代順にくわしくまとめられている。さらに付録には「我が国の植物学者と標本館に標本が保管されている採集家達のほとんど全部の筆跡が写真で公開されたのはこれが初めてである」と力説されるとおり、145 枚の写真により、主にラベルに記された彼等の筆跡を載せている。本書はロシア語で書かれているため Stafleu が Taxon 17: 303-304 で評している Shetler の The Komarov Botanical Institute や, Levedef, Lipschitz 等による An outline of the history of the V.L. Komarov Botanical Institute of the USSR Academy of Sciences (1714-1961) に比べ読みにくい点はあるが、日本と密接な関係のあるソビエトの分類学研究史が具体的におさめられており、付録の特色ともあいまって有用な出版物であると思われる。(邑田 仁)